国家の輪郭と越境
第二回研究会『Mother India』PartⅢを読む　報告書

日時：平成 21 年 5 月 26 日 15～17 時
場所：大阪大学箕面キャンパス総合研究棟 6 階「国家の輪郭と越境」プロジェクトルーム
参加者：4 名
テキスト：『Mother India』(Part III pp.145-217)
Katherine Mayo, 1927, Blue Ribbon Books, New York
担当者：豊山　亜季　大阪大学（学振 PD）

Part Ⅲではカースト制度、特に不可触民をめぐる問題と、インドの教育制度に対する批判が主に扱われた。全体を通して、ここではメイヨーは自身の体験に基づいた記述ではなく、インド国内外の識者の意見を引用することを中心にしている。その結果、パートⅡで見られたような生き生きとした描写、並びに力強い主張を感じることができない。メイヨー自身の主体性を探りながら、研究会は進められた。

最初にメイヨーは、反バラモン勢力が著しいマドラスを取り上げ、低位カーストの政治家の口を借りてバラモン批判をした。ここで初めて南インドに目が向けられたことになる。低位カーストの有力者は、ヒンドゥー社会の中でいかにバラモンが「既得権」を振りかざして、彼らを搾取してきたのか、具体的な事例とともに言及する。バラモン批判から話はカースト制度に対する疑問、そしてその制度にしっかりと結びついた、「人間以下」の扱いをうける不可触民の問題へと発展している。メイヨーはカースト制度と、それを容認、肯定してきた大多数のヒンドゥー教徒を批判する。そして同時に、不可触民の権利拡大に努めている欧米のミッション並びにイギリス政府の功績を讃え、さらにインドを訪問したイギリス皇太子が不可触民たちから熱狂的に歓迎され、「彼の顔に光が見える！」と讃えられた様子を詳細に描写している。そして英国統治を、インドに救済をもたらす「光」であると結論づけるのである。

カースト制度に続いて、インドの教育制度批判が述べられた。まず、バラモンが教育を独占していたインドに、万遍なく教育をもたらしてくれたのはイギリスだ、とイギリス統治の支持がインド人政治家の口から語られる。そして西洋教育の普及に尽力した政治家、教育者たちの活動が紹介されている。ここで興味深いのは、いわゆる西洋近代教育を受けたインド人エリートたちが、その知識を国の発展のために活用していない、とメイヨーがしきりに指摘している点である。彼らは公職を得、名声を得るためだけに大学教育を受け、それ以外の職につくことをかたくなに拒む。それをメイヨーは「インド人の利己的な精神構造」だと批判する。メイヨーの主張によれば、その「利己的な精神構造」ゆえに、農村部や不可触民、そして女性への教育が普及せず、インドは貧困のままなのである。メイヨーは農村部に強い思い入れがあるようで、「尊厳を与えられ、興味深く協力的」「愛情と配慮を持った」人々である、と農民を好意的に捉えている。しかし彼女が一体どこの農村でどのような「農民」と交流を持ったのか、それらに関する記述は一切なく、ど

の程度農村の実態を把握していたのか、この文章については参加者から疑問の声がいくつも上がった。

また彼女は、近代教育の普及を妨げているとして、ガンディーの教育観を批判的に取り上げている。この章に限らずガンディーについて言及している部分は多々あるが、そのいずれもが否定的な扱いである。彼女はガンディーを「時代遅れ」「前の時代に多大な影響力を持っていた人物」だとみなしている。しかし 1920 年代後半のインドで、ガンディーの存在は日に日に大きなものになっていたはずである。メイヨーの認識がどのように生まれたのか、非常に興味深い点である。

前述の通り、全体を通してメイヨーの強い主張があまり感じられない第 3 部であった。第 4 部は「Mr.Gandhi」というタイトルの章から始まり、インド国内での改革について述べられている。担当者は文化人類学の研究者であり、長年の農村での調査経験を持つ。その経験から得られた見地で、メイヨーの問題意識が分析考察されることが期待される。

第三回の研究会の参加者は、本プロジェクト関係者 1 名の他、大阪大学非常勤講師を含めた美術史、人類学等さまざまな研究分野の若手研究者であった。分野を超えて集まり、一冊のテキストを同時に論じることは、地域研究の発展を模索する上で非常に有益な作業であるといえるだろう。

最後に今後の計画を話し合い、第四回の予定ならびに担当者を決定した。

今後の予定は以下の通り

第四研究会：6 月 30 日 15 時～17 時（Part Ⅳ） 於大阪大学箕面キャンパス

文責　小松久恵（第 5 班プロジェクト研究員）